わたくしの
シルクロード ②

横張和子

刺繍

先日、シリアの国立ダマスクス博物館から考古学者のA・ブンニー博士が日本にこられました。地中海に近いこの国の方たちは、ヨーロッパにはしばしば出かけられても、極東はなお遠い所で、博士ご夫妻も、まだご存知ないとかで、今回はじめて、日本を訪れられたのでした。わたくしも久々の再会でしたので、ごあいさつに上って、一日、東京のお買物のお伴をしました。そのお帰りの際に一枚のテーブル掛けを下さいました。それはダマスクスの有名なオムマヤドモスクの近くのスーク(市場)で売られている特産の刺繍布でした。なじみのあったそれは、木綿地に、一面に花柄が鎖繍(チェーンステッチ)であらわされています。花柄といっても、規則性があって、幾何学文風でもあります。つまり、これもまたイスラーム寺院の壁面などを飾るアラベスクなのでありましょう。イスラームでは神の支配する空間に大きな影響を及ぼすような人間や動物の表現は禁じられ、また物の自然な形を写すこともよしとはされなかったので、物の形は抽象的となり、それが建築や工芸品の上に支配的となり、発展し、殆んど空白を残さないまでにおおいつくしています。それはいかに無限の豊富さ

をもち、奔放に見えても、けっして混乱があってはならないのです。たしかな計算や幾何学的な感覚が基本にあって、それが規範となって、面装飾の構想を律しているのです。このテーブル掛けの花模様にもそうした特徴があると思うのですが、それはまた手なれた鎖繡の手法で一層リズミカルな調子をそなえています。

ダマスクスは聖書ではダマスコ Damasco、アラブ人はディマシュク Dimashq と呼び、世界最古の町として知られていますが、そこは古いメソポタミアの文化を背景にした、オリエントの濃厚な特質と共に、ヘレニズムの強烈な光被をも蒙っており、また初期キリスト教の舞台でもあります。こうした文化の混在は町の中を歩いていても至るところにみられ、人々の生活の中に息づいています。このテーブル掛けの縁飾りのようなところにも見出されます。花模様のテーブル掛けにはどれにも、あるきまった形の縁飾りがぬいつけてあります。日本の菊の花を側面からみたような花形を弧を描く線でつなげた連続模様です。これは今日、パリのルーブル博物館所蔵のアッシリア・ニムルド出土の浮彫にみられる聖樹や、ベルリン国立博物館蔵のバビロン王ネブカドネザル二世の王座室の彩釉煉瓦の装飾などにみられるものに似ています。この原型はこれらの古代の形に求められるといっても過言でなく、この町では悠久の年月の過去が、現在に生きているのです。

さらにこの鎖繡という刺繡の技法をみても言えそうです。

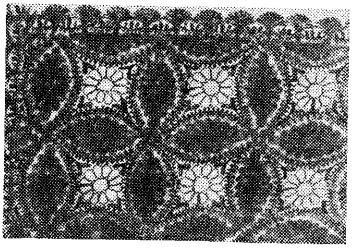
鎖繡（チェーンステッチ）は一本の糸で輪を作りながら布の面にぬいつけていく技法ですが、これまで世に紹介された中国の古い刺繡では鎖繡の技法が圧倒的で、この技法によるものがあれば、即座に、中国の産と識別し得るほどであります。シリアのパルミュラのローマ時代の遺跡の墓からも刺繡布が出土しました。しかしその刺繡布は様式的にも文様的にもまた技法的にも相違した二種類が認められました。その一種は、明瞭に鎖繡です。美しい浅葱（あさぎ）の色の薄絹の上に、赤、薄紅、藍、緑、黄などの彩糸を使って、幻想的な鳥や動物（竜）の模様を、きわめて緻密な鎖繡の技法であらわしています。独特な文様とその精巧な手法から、これら確実に漢代中国の刺繡とされました。このような鎖繡の刺繡の遺品はパルミュラばかりでなく、その美事な作品を、わたくし共は近年の中国の発掘事業の成果の中に見出すことができます。

これは日本でも公開されたものですが、今から二千百年ほど前、つまり前漢初期のものです。長沙市馬王堆の墓が一九七二年に発掘されたのですが、三重の木槨、三重の木棺の中から、およそ五十歳ぐらいの女性があたかも生けるが如き状態で発見されました。それは副葬されたかめの口を封じた粘土におしてあった印文（封泥）により、前漢初期の長沙王の宰相であった人の夫人で

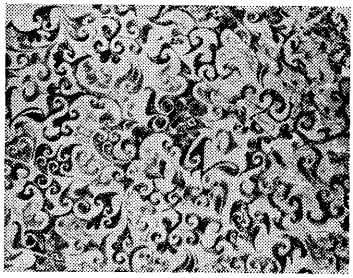
あることが分りました。副葬品の品物はどれも優秀な作品で、当時の技術水準の並々でない高さは驚くべきことでありました。多量に発見された絹織物もまた多彩にして精巧で、これらにより世界に先駆けて発達した絹の紋織物の技術が、すでに前漢の初めごろには完成の段階にあったことが示されたのです。中でも圧巻であったのが、薄地の平絹や羅、綺にぬいつけられていた鎖繡の刺繡です。それは中国に独特な、渦を巻く雲形の文様を、極めて精緻な手法で、ぬっています。このような布は、刺繡によって厚味を生じ、流麗に、躍動に満ちた雲文様はまた古代の神秘をたたえ、おかしがたい気品をそなえています。

刺繡のある布は錦と共に、その壮重な豪華さのゆえに、貴ばれ、中国周辺の民族の首領にとっては、それは圧倒的な魅力であり、渇仰的であったのです。それらは北蒙古のノイン・ウラの匈奴の墓から、また遠く北シベリアのアルタイ山中のバジリクのスキタイ人の墓から、また中国の勢力が消長した西域の国々の遺跡から、数多く発掘され、いずれも同一の技法であり、一見して、中国の産であることを認めさせます。これに対してパルミュラではもう一種の刺繡布が出土していることは前述しましたが、今、それについて言えば、それらもまた薄い地の平絹や平地の綾にぬいつけられています。地になっている絹は中国からもたらされたものです。

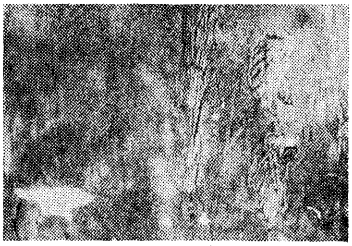
しかしその刺繡はとみれば、それはこれまで述べてきた中国の



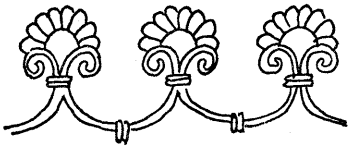
▲ダマスクスの刺繡（現代）



▲中国の刺繡（B. C. 3 世紀）



▲パルミュラの刺繡（A. D. 3 世紀）



▲バビロンの彩釉煉瓦壁面の
ロゼット文つなぎ模様

それとはかなり異った印象を与えます。まず模様ですが、これはどれも植物文様です。ある図柄について言いますと、その特徴は模様の左右の相称性で、一本の幹を中心に、その両側に、先端が細くとがった穂のようなものをのせた枝が、三～四段、規則的に張り出し、その中間に、双葉がようやく芽を出したというような図です。このように顕著な相称性というのはオリエントの美術の中でしばしば指摘されるもので、この植物文様の祖型には、先ほど述べたアッシリアの聖樹の図も考えられます。これらの刺繍布はパルミュラの塔墓に埋葬されていた人々の遺骸を包んでいたものなのですが、刺繍は特に、死者の胸の上のあたりにあったということですから、これは生命の樹でもあり、死者の生の復活をねがって、ぬいつけられたものかと解釈されます。ところで、その技法は、非常に大雑把な手法で、しかも手なれた仕事振りです。用糸は絹糸の太いものです。この刺繍のやり方を詳しく調査したR・フィスター Pfister によれば、これもまた中国の鎖繍のバリアントであるという結論です。大まかな刺し方であること、一本の糸を二つに割って輪を作って、鎖繍風にしてあることなど、実はそれは当時全く貴重な絹糸を経済的に効果的に使うための工夫であったのです。

鎖繍の技法のそもそもの創始はどこであったのか、一説には、前四世紀ごろのものがクリミア半島の古代ギリシャ人の植民地の墳墓から発掘されていて、スキタイ人が発案して、中国にも伝えられたとされていますが、なお定説はなく、今、ここに現代のシリアの鎖繍のあるテーブル掛けを前にして、この技法の源流が、中国の刺繍にあるとすれば、そのモデルを運び来ったのは「絹の道」であり、二千年も前の技法が、こうして、西方の地に根づいて、その地の人々の伝統工芸の技法となってしまっていることは面白いことだと思うのです。

わたくしはこの原稿の途中で、関西の方に行く用事ができました。その一つに、大阪のかつて万国博覧会が開催された跡地に建設された国立民族学博物館をお訪ねすることも含まれていました。二階、展示場には各国の民具や織物や刺繍などが豊富に陳列されてありますが、中で、中央アジアの部では、ソ連邦ウズベク共和国の人々の手になる刺繍が、やはり鎖繍であることを認めて、古代の絹の道に沿った国の人々や、またその終端の国であったシリアの人々が、同じ技法を得て、もはや全く自己の伝統にしてしまっていることを知って、シルクロードが果した東西文化交流の役割の大きさをあらためて知ったことでした。もっとも、そこには、例えば図柄などにその民族性が色濃く示されてはいますけれど。

（古代染織史研究家）